

「地域への関わりに新しい選択肢」



会えなくても、つながれる。「オンライン公民館」

今年4月、新型コロナウイルスの流行で公共施設が休館し、市民活動の場が奪われました。そこで、新たな交流の場として「オンライン公民館」が誕生。始めたのは、久留米を拠点に事業やイベントの企画を行う翁昌史さんと中村路子さんです。参加者はビデオ会議アプリ「ZOOM」上で交流します。5月4日、5日を皮切りに、毎週日曜に開催。参加者はじわじわと増え、多い時は70人ほどが来館しています。

コンセプトは「距離を保つ時代に、心の距離がぐっと近まる」。1日に10数個の多彩な企画が並びます。多くのつながりをつくる「友達の友達の友達とトモダチになれるのか」、久留米緋愛溢れる女性の「カスリトーーーク」、家族の絆について考える「ファミリータイズ」など。顔を出して企画に参加しても、顔は出さずラジオを聞くように楽しんでもOK。入室も自由です。

(写真) ある一日の企画ラインナップ。各企画への参加スタイルをアイコンで表示しています

す。

“機能不全”を“革命”に変換

「きっかけはコロナ禍で街に現れた機能不全。自治の拠点である公共施設が休館するだけで、まちの動きがこんなに止まるんだと実感しました。そんな中でもネットワークコミュニティは動いていた。それを生かそうと思いました」と翁さんは話します。

中村さんは“新しい居場所の誕生”と表現。「地域との関わり方に起こった革命です。地域や人と関わる入口が増えただけでなく、関わり方の幅が広がった。現実の場より気軽に企画を実現できるし、顔を出さずに参加できるから、“透明人間”として場に居られる。今まで地域と関わる機会がなかった人も関わりやすいんじゃないかな」。



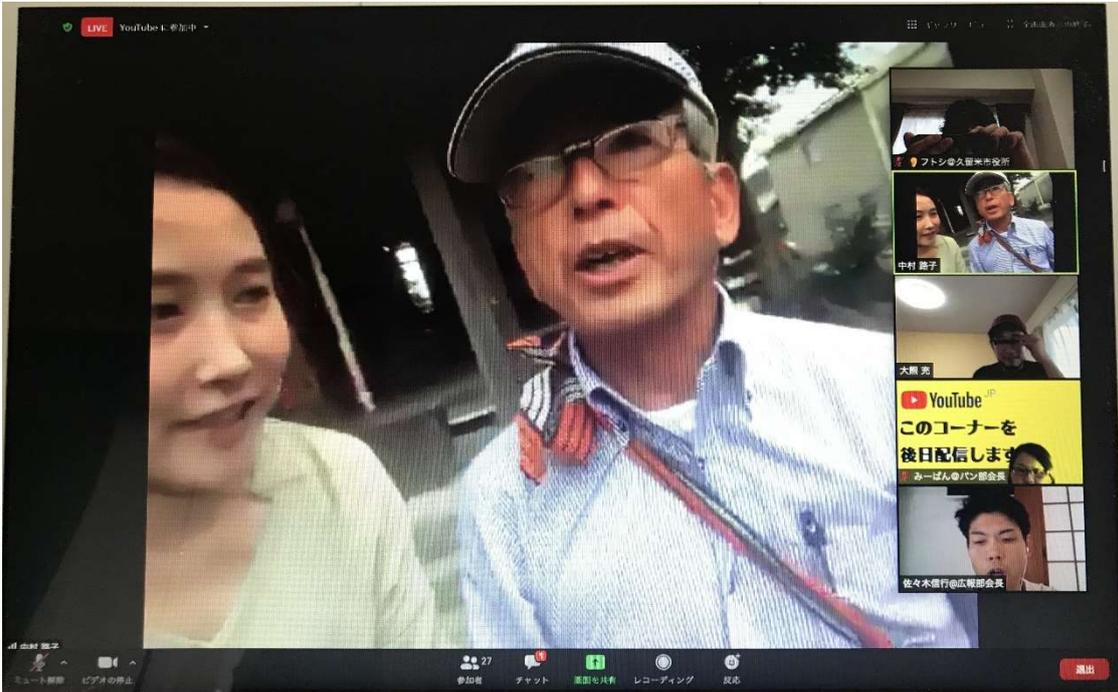
(写真) PC上で展開されるオンライン公民館の講座の一コマ

新たな可能性。オンラインで出会い、リアルでもつながる

インターネット上のオンラインは、距離を超越できるツール。世界中から誰でも参加できます。しかし、たくさんの“地元の人たち”で賑わっているのが、このオンライン公民館です。

「地域に飛び込むのは敷居が高い」「家から出るのがおっくう」「暇が無い」。近くに居ながらも繋がりがきれてなかった人たちの心の壁を取り去っています。世代や立場を越えて、今まで会った事の無い“ご近所さん”たちが繋がっています。

オンラインだけでなく、現実の地域と融合した企画も生まれています。7月5日、江上校区コミュニティセンターの池口隆会長が出演しました。中村さんと校区を歩きながら、名所や史跡をクイズ形式で紹介。画面を通して参加者と交流しました。これからも市内各所で展開される予定で、新たなつながりを生む可能性を秘めています。



(写真) オンライン公民館事務局の中村さん(左)が池口会長と一緒にまち歩き

オンライン公民館は、日本公民館学会も注目。定例会の課題研究の題材に選ばれました。自らを“ギリギリ”公民館世代と言う2人が生んだ、新たな集いの場の形。じわりと広がりを見せています。(第1回終わり)

この動き「くるめ支え合うプラン」ではどの取り組み？



[久留米支え合うプランのページへ](https://www.city.kurume.fukuoka.jp/1050kurashi/2050fukushi/3100chiikikeikaku/2020-0401-sasaeauplan.html)

<https://www.city.kurume.fukuoka.jp/1050kurashi/2050fukushi/3100chiikikeikaku/2020-0401-sasaeauplan.html>

この地域で命は奪わせない

—避難行動要支援者名簿を使った図上訓練—



豪雨災害後わずか2週間で開催

2020年7月5日から降り出した記録的豪雨で、6日には市内ほとんどの地域に避難勧告・指示が出され、最大約1400人が避難しました。11日までの総雨量は772mm。24時間最大雨量は観測史上最大の360.5mmという大雨は市内各地に大きな爪痕を残しました。

それから約2週間後の7月20日。甚大な被害を受けた北野校区で避難を想定する図上訓練が開催されました。この校区は陣屋川の流域にあり、以前から大雨が降ると多くの世帯が床上・床下浸水に。そういった土地柄、同校区まちづくり振興会会長の南島和夫さんは、住民の防災意識は高いと感じています。「これまでも訓練をしてきて、地域で声を掛け合う文化は根付いていると思います。でも最近の雨はすごいから、やはり備えないと」。



図上訓練時に校区内の被災映像を見せながら、直前の水害を振り返る南島会長。

手助けが必要な人の避難をどうするか

市の地域福祉課と防災対策課の協力のもと、各校区が主催する図上訓練の特徴は「避難行動要支援者名簿」を使うことです。この名簿は、災害時に自力や家族だけでの避難が難しい人の“命を守る”ために必要な情報を登録した物。訓練では自治会ごとに名簿と地図を広げて地域ぐるみで避難の動きを想定します。名簿に登録された人の家に赤のシール、名簿には載っていないけれども手助けが必要だと思う人の家には黄色のシールを貼り付け。その人たちの支援者を決めて避難ルートを考えます。名簿に限らず、近くに住む要支援者の存在を共有し、日頃から声を掛け合うことが、いざという時に役立つのです。

「避難行動要支援者名簿」のページへ

(<https://www.city.kurume.fukuoka.jp/1050kurashi/2050fukushi/3170supportfor/2019-0620-1307-211.html>)

訓練には約40人が参加。「〇〇さんの家はどこかね?」、「ここはこの前浸水しとったぞ」、「この前の雨ぐらいやったら、この道で避難所に行けた」、「そこは通っちゃいかん場所た」。被災したばかりだからこそ熱を帯び、実経験を生かした実践的な訓練になりました。





地図上に支援者の家や浸水箇所、避難ルートを書き込みます。浸水から間もない時期のため、参加者の記憶も新しく、具体的な避難想定がなされていました。(2枚目は画像を加工しています)

これ以上苦しむ人を増やしたくない

訓練に参加した男性は、“自分一人だけ意識を持っていても、どうしようもない時があると気付いた”と感想を話しました。男性は、先日の水害で外出先から家に戻れませんでした。訓練で自宅周辺の要支援者を改めて意識したときに、自分が家に戻れなかったり、家から出られなくなったりした場合、自分だけでは太刀打ちできないと感じたそう。「地域ぐるみで意識を持たないと、守れない命があると感じました」。

同振興会事務局長の飛永光さん。今年の水害で自宅が床上約 80 cmにも及ぶ浸水被害を受けました。平成 30 年豪雨では 73 cm、24 年にも 30 cmの床上浸水被害を受けた飛永さんは、訓練の終わりにこう話しました。

「私は 3 回目の被災。被害の映像を見ると、少しだけ心が折れそうになります。でも、映像を見て、そういう人が近くに居ることを実感してほしいとも思います。できれば、こういう気持ちになる人が増えないでほしい。そう願うばかりです」。

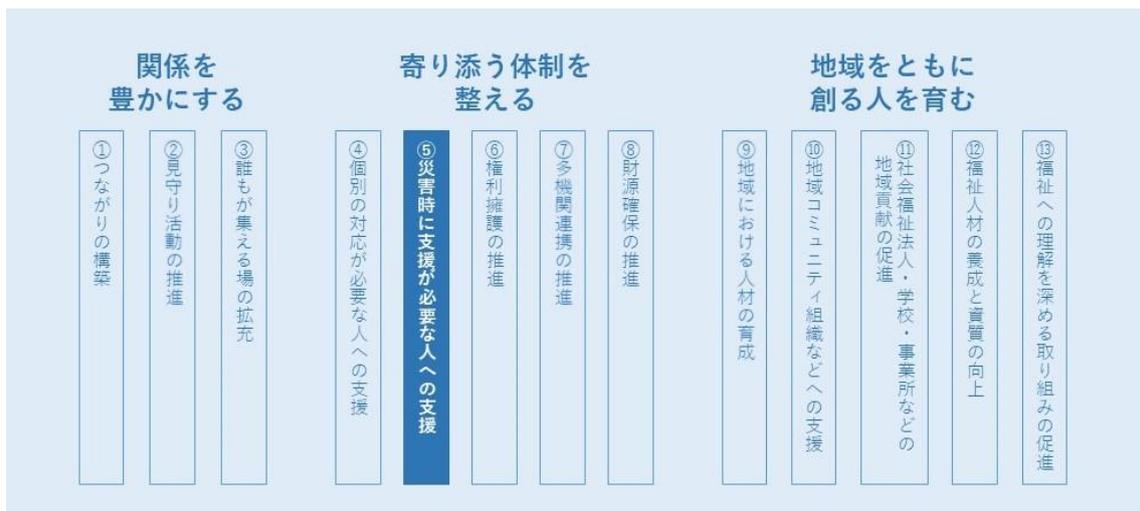


正面左が飛永さん宅。玄関の引き戸から、大人の腰付近まで水面が来ていたと推察できます

自然災害に対して一人では何もできない。自分が被害を受けていなくても他人事ではない。被災して苦しんでいる人がすぐそばに居る。図上訓練という仮想の場で、直近の災害の生々しい記憶や映像を通して、住民同士で寄り添うことの大切さを再認識しました。

毎年起こる災害を目の前に、私たちは今、どういう行動が求められるのでしょうか。

「この動き「くるめ支え合うプラン」ではどの取り組み？」



久留米支え合うプランのページへ

(リンク :

<https://www.city.kurume.fukuoka.jp/1050kurashi/2050fukushi/3100chiikikeikaku/2020-0401-sasaeauplan.html>